
春待ち風に吹かれて

みけぺん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春待ち風に吹かれて

【Nコード】

N2840K

【作者名】

みけぺん

【あらすじ】

私は過ちを犯した。獣の記憶と力に吞まれて。そんな私にも、春を届けてくれる人がいた。私を想い、一生懸命に私を止めてくれた人が。——ねえ翔ちゃん。私にもいつか、風を感じ取れる日が来るのかな？

『仮面ライダーW』の外伝的エピソードを意識した突発短編。翔太郎と、ある女性のその後と、春の訪れをメインにしたお話です。

(前書き)

どうも、不精なモノカキ風情のみけぺんと申します、はじめまして。連載作品『ほしにねがいを』を読んで下さっている方は、お久しぶりです。

この度、リハビリ習作として、現在放送中の東映作品『仮面ライダーW』を下敷きにした短編を突発的に書いてみました。

メインは左翔太郎くんと、『ダブル』本編の第1〜2話のゲストにして、彼の幼馴染・真里奈さん。ティーレックスドーパントとなつて暴走し、逮捕に至った彼女のアフターストーリーみたいな感じで見ていただければと思います。

ただし、ガイアメモリによる逮捕者の末路など不明な点が多いため、その辺は作者の想像で大部分を補いながら綴りました。

とりあえず深いことは考えず、さくつと読める日常風景を意識します。

その辺りを了承の上、「おっけーだぜ」という奇特な方は、本編へどうぞ←

「——津村真里奈。面会だ」
重々しい開錠音の後、看守の呼びかけに、彼女はのろろと立ち上がった。

逃走防止の手錠とロープに繋がれたまま、長い廊下を歩いていく。
仄暗く、埃っぽく、平坦で、歩むだけで氣力を吸い取るかのような、
長い廊下——。逮捕されてから半年、不本意にも通い慣れてしまった道のりだった。

正式にはまだ、刑に服しているわけではない。

しかし、子供の頃から吹く風が幼馴染のようなこの街の中で、風と空を遮断された塀の中に隔離され続けることは、思いのほか苦痛だった。きつと、他の被疑者や服役囚たちにとっても同じことだろう。
風は、様々なものを人々の元へ届けてきてくれる。

草花や土、潮の香り、苔を含んだ河川の匂いや食欲をそそるレストランの料理の匂い。人ごみの喧騒、ラジオ放送の音声、鳥の声、木々の葉が擦れ合う音、風車の羽根が回る音……

そして何より、頬に吹き付ける風の感触は時に街の人間を暖かく慰め、時に冷たく苛んだ。それが風都の日常だった。

だが、硬い壁と床に囲まれた独房には、匂いも音も声も届かない。
時折、細かい埃がもわもわと漂うだけで、頬に感じるほどの風など吹き込むはずもない。

この風の無い環境こそが、風都で生まれ育った人間にとって何よりも重い罰なのだ——

そんなことを考えているうちに、面会室へと辿り着く。

相手が誰かを聞きそびれていたが、どうせまた担当の検事か弁護士が裁判の辻褄合わせに来ただけだろう。手錠を外された真里奈は高を括って、看守に促されるままに入室した。そして、

「——よう」

ガラスの壁の向こうから片手を上げた面会相手の姿に、大きく息を呑んだ。

はねた栗毛に、絶妙な角度で乗ったソフト帽。皺の無いボーダーのシャツに、暗色のベストと、襟元でしっかりと締められたネクタイ、それと揃いのズボン。腕には灰色のトレンチコートが掛けられている。

「……しょう、ちゃん……」

真里奈が呆然と呟くと、彼——左翔太郎は、悪戯が成功した子供のように笑みを浮かべる。

「久しぶり。最近依頼が多くて、顔見に来るの遅くなっちゃった……悪いな。とりあえず座れよ」

立ち竦む真里奈に、翔太郎はそう言った。

視線をさまよわせながらも、目の前に置かれた硬いパイプ椅子に腰を下ろす。向かい合わせですでに座っていた翔太郎は、声を通すためにガラスへ空けられた穴の方へと顔を近づけた。

「具合、どうだ？　ちゃんと飯食ってるか？」

問われて、思わず顔へ手をやりながら「ええ……」と咄嗟に答えていた。

指先で触れた頬は、自分でも分かるほどに脂肪が削げ落ち、その下の骨の感触が伝わってしまうくらいに痩けている。あまりにも粗末

な嘘だったが、翔太郎は軽く眉間に皺を寄せただけで、それ以上深く追求しなかった。

「そうか…。勾留中だからって、ヤセ我慢すんなよ。困ってることがあったら、なんでも言え」

何の遠慮もない親しげな言葉に、真里奈はただ頷き返す。

胸の内に溢れ返る後ろめたさで、とてもじゃないが視線を合わせる事ができない。

「とまあ、それはさておいて。……差し入れ持ってきたんだ。大した物じゃないけど」

「……そう。ありがとう」

「うん。いや、あのな…。その、なんつか、ちょっと……想定していたよりすげーことになっちゃって……あんま驚かないでくれ」
急にしどろもどろになった翔太郎の様子に、端的な反応ばかりしていた真里奈もさすがに眉をひそめた。

翔太郎は座ったまま足元からガサガサと何かを取り出し、真里奈の目の前に置いた。

「……それ、何？」

目を瞬かせて尋ねる。そこには、ぱんぱんに膨れた紙袋が一つ。

一人分の差し入れにしては——少し量が多すぎやしないか。

「あー…。悪いな、実は…うちの事務所の奴らとか、知り合いとかに今日の面会のことを話していたら、寄ってたかって色んなモン押し付けられちゃった」

若干辟易した顔色を見せながらも、翔太郎は紙袋へ無造作に手を突っ込んだ。

取り出したのは、何かが詰め込まれ、輪ゴムで留められたプラスチックのパック。

「これは、亜樹子手製のたこ焼き。前に事務所に来たときに、やかましそうな女子中学生がいただろ？ そいつが作ったんだ。……部屋の中で勝手に焼き始めやがって、後片付け大変だったんだぜ」
はあー、と深く嘆息しつつ、プラスチックを置く。

中身のたこ焼きにはソースやマヨネーズ、鰹節などのトッピングが施され、ご丁寧には紅生姜まで添えられているという手の込みようで、軽い感動すら覚えた。

続いて紙袋から出てきたのは、色の鮮やかな蠟燭。

「アロマキャンドル。うちのフィリップが若菜姫に夢中でさ。前に、若菜姫がはまっていたのを思い出して。芳香と照明効果が気分を落ち着かせるだのなんだのって蒔蓄並べながらゴリ押ししてくるんで、オススメのキャンドルを聞いて代理で買ってきた。ついでに、キャンドルの効果をより高められる方法をメモしてたから、それもオマケだ」

折りたたまれた便箋と一緒に、パックの隣に据える。蠟の表面には艶やかな花柄が描かれていた。

さらに取り出したのは、どこか見覚えのある落ち着いた柄の箱。

「これ、和泉和菓子店の期間限定商品のひな祭りセット。風花まんじゅうで有名だろ？ その旦那と縁ができて、サービスしてもらったんだ。……ずっと屋内に籠りっぱなしじゃ、季節感も何も無いからな」

かたりと蓋を開けると、小袋に詰められたひなあられや菱餅、薄紅色の花や風車を象った干菓子のようなのが並んでいた。

次に出てきたのは、打って変わって洋風菓子を納めるような取っ手付きの箱。

「こっちは、パティシエの浅川麻衣さんが作ってくれたショコラ：なんとかってケーキ。浅川勇三って知ってるか？ 街でナンバーワンのパティシエらしいんだけど、前にその娘さんの依頼受けてな。是非お前にも食べて欲しいって言われてきた」

そつと上の蓋を外すと、中にちょこんと入っている直方体のケーキの姿が垣間見えた。

シンプルでいて繊細なデコレーションが施され、思わず見とれそうなチョコレートケーキだった。

さらに翔太郎は、いやに派手なクリスマスカラーの小さな袋を出し

てくる。

「えーと：よく情報仕入れてくれるサンタちゃんから。中身はスケッチブックと折り紙：？ 子供向けのプレゼントみたいだけど、一応な」

なんでこんな物しか無いんだか、と溜息を吐きつつ、今度は一枚のCDケースがその隣に置かれた。

「これはエリザベスとクイーンのCD。こいつらもよく協力してくれんだけど、最近フーティクアイドルって番組でデビューして：趣味に合うかどうかはともかく、景気づけに聞かせてやれて無理矢理買わされた。参ったぜ」

ジャケットで女子高生二人がポーズを決め、こちらへ視線を送っている。

ガラスの障壁越しにずらり並べられた差し入れの品々に、真里奈はただ言葉を失っていた。気付いた翔太郎はバツが悪そうに首の後ろを掻く。

「まあ、そのー：別に全てもれなく受け取れなんて言わないさ。そもそも、数とか内容とかで本来規定外な物とか混じってんのに、刃さんに無理言って通させてもらってるし。けど、くれた人達の気持ちも無下にはできないし：とりあえず、真里奈が必要だと思う物だけども渡そうと思って、……！？ ま、真里奈？ どうした？」

翔太郎がうろたえたのも無理はない。

ガラスの向こうに座った真里奈が両手で顔を覆い、嗚咽を漏らしていたのだから。

「……ごめんね……」

しゃくり上げながら、ぼつりと真里奈が口にした。

「ごめんね、翔ちゃん……あたし、ほんとに……ごめんね、ごめんね……！」

まだ隈が色濃く残った目元に大粒の涙をこぼして、真里奈はただひたすらに謝罪の言葉を繰り返した。

——そういえば、こうして真里奈とまともに顔を合わせるのは久しぶりかもしれない、と翔太郎は思う。

ティーレックスのメモリを壊し、刃野たちに引き渡してから、力に吞まれて衰弱した彼女は警察病院に即刻収容されてしまった。

その後も厄介な依頼が立て続けになったり、取り調べの合間に見に行っても、メモリの毒素が抜け切っておらず精神状態が著しく不安定で、会話が成り立たなかった。

時間が経過し、心身ともに快方に向かい、自分の置かれた状況に理解が及び始めた今のタイミングに会いに来たのは、ひよつとしたら逆効果だったのだろうか。

不意にほろ苦い後悔に襲われて、翔太郎は唇を噛んだ。

そして慎重に言葉を選んで、真里奈に呼びかける。

「……いいんだよ、もう。いつまでも引きずるなんて、ハードボイルドじゃねえし。俺は真里奈が：昔のお前に戻ってくれただけで十分だ」

「……翔ちゃん」

嗚咽の止まった真里奈が、やつれた顔を上げる。

「ていうか、俺こそごめんな。差し入れとか言って、他の奴らがくれた物ばかりで俺からは何も用意できなくてさ。次来たときには、ちゃんと用意してくるから」

取り繕うようにそう言うと、真里奈はくすりと笑みを漏らした。

「：いいのよ、そんなに気を使わないで。それに、翔ちゃんからは：もう貰ってるから」

「——んっ？」

「その帽子とベスト。あたしがウィンドスケールでデザインした物でしょ。わざわざ着て来るなんてね」

薄々勘付いていたことを指摘すると、翔太郎の目が途端に泳いだ。ソフト帽には小さな羽根がコサージュとして縫い付けられ、ベストは左胸のポケットの辺りに、同じく羽根と風車を組み合わせたよう

なシンボルマークが刺繍されている。そしてどちらにも「WIND SCALE」のロゴが見えた。鳥の羽根は、真里奈がいつもデザインに盛り込んでいたモチーフだ。

翔太郎は動揺を隠すように帽子を被り直し、ベストの襟元を掴んだ。「えっ？ あ、あー。いやー…そうだったのか？ なんか、この間店に行ったら目に付いて、衝動買いしちゃってさー。お…お前のデザインとは気付かなかったなあ。偶然だな？

でも、なかなかいいと思うぜ！ えーと、世辞なんかじゃなくてホントに。うん。今度、フィリップとか亜樹子にも勧めてやろうかと思ってさあー。ハハハハハ」

挙動不審の一言に尽きる翔太郎の態度に、真里奈はまた笑った。どうやら、あくまでしらばっくれるつもりらしい。

「……ありがとう、翔ちゃん」

静かに言葉を添えると、翔太郎はしばし硬直してから、照れたように頬を搔いて「…おう」と答えた。

「…ねえ、翔ちゃん。その差し入れ、全部もらっていいのよね？」

「——はっ？ これ、全部!？」

「だって、せっかく翔ちゃんの知り合いの人達が用意してくれたんだもの。受け取るのが筋じゃない？」

「それは、まあ…。一応、刃さんの口利きで許可も貰ってるけど、別に無理しなくていいんだぜ？ 第一、食い物とか絶対多いだろ。食べ切れないぞ!？」

「大丈夫。女の子は、甘いものは別腹なのよ? ……他の人達に、ありがたく頂きますって伝えてくれる? 」

宥めるような口調に、とうとう根負けした翔太郎は諦めたように溜息を吐いた。

「……分かった。じゃあ、後でそっちに届けてもらうから。

けどな。礼はお前の口から直接言え」

「……え？」

「罪償って、外に出れたら…またうちの事務所に来い。なんだったら俺が迎えに行ってやるし。　ていうか、一度直接話しに来てくれ。真里奈のことを喋って、どうしてもこいつも冷やかに来てかなわん」頭痛でも覚えたかのように額へ手をやりながら、翔太郎がぼやいた。思わず真里奈の頬が緩む。

「…うん。そうするわね」

「…ああ」

短く返事をして、翔太郎は並べた差し入れを紙袋に詰め直し始めた。真里奈の後方に控えていた立会いの看守が、短い面会時間の終了を告げたのは、ちょうどその時だった。

「……それじゃ、また会いに来るから」

「うん。――またね、翔ちゃん」

「おう」

共に立ち上がり、軽く挨拶を交わす。――まるで、学校帰りの同級生たちがそうするかのように。

翔太郎は紙袋を抱えて小さく手を振って見せ、真里奈は看守に再び手錠をかけられながらも、優しく微笑み返した。

「おかえり、翔太郎」

拘置所の出入り口で待ち受けていたフィリップは、白紙の本のページをめくりながら目も合わせずに言った。

その横では、亜樹子が「やっほー！」と一人ではしゃいでいる。

「……ああ。さて、用事も済んだし、さっさと帰るか」

「真里奈さん、元気にしてた？」

「まあな。やっともともに話げできた。差し入れも渡せたよ」

「おー、良かったじゃん。あたしのたこ焼き、きつと喜んでくれたわよねー」

「……それについては保証しかねるな」

「ちよつ、どういう意味よー!？」

「それより、アロマキャンドルの使い方のメモはちゃんと渡してくれただろうね? 若菜さんの特集記事と地球の本棚^{ほし}を検索して最も効能を引き出せる使用法をまとめたんだ。キャンドルだからつただ火を点ければいいってものじゃない。ちゃんと正しくて相応しい使い方をしなければ、せっかくの効果が時には半減することもある、それこそ宝の持ち腐れだし――」

「あー分かってる分かってる!! ちゃんと一緒に渡したから、その話は終わりだ!」

とりとめもない会話を繋げながら外に出る。

それを見計らったかのように、ひゅるりと一陣の風が三人に吹き付けた。あちこちに備えられた風車が、かたかたかた、と一斉に回り出す。

「――風が、暖かくなってきたな」

僅かに浮いた帽子の鍰を押さえながら、翔太郎は、ほう…と溜息を吐いた。

「……ほんとだ。もう三月だもんね」

襟元に巻いていたマフラーをそっと緩めて、亜樹子が頷く。

「これが春一番……というものなのかな?」

ゆっくりと呟いて、フィリップが視線を上げた。

頭の上で、蕾の膨らんだ花の枝が、待ち焦がれるように揺れていた。

取り次ぎの警官の嚴重なチェックを経て、独房に届けられた紙袋。

中から取り出した差し入れの数々は、独房に置かれた低い机へ広げられていたが、その中の折り紙だけが既に封を切られていた。

真里奈は手にした若草色の折り紙で、何かを形作っている。

「……できた」

呟いて、真里奈はたこ焼きのパックと一緒に入っていた割り箸を、その中心に突き刺す。

風都の住人であればまず一度は作った経験が持つであろう、折り紙の風車を掲げて、真里奈はにっこりと満足そうな笑顔を浮かべた。肌寒さで指先がかじかむのと、鎖骨の辺りに残った生体コネクタの痕が痺れるせいで、うまく折ることができず、少し不恰好になってしまったが。

しかし、真里奈はその不恰好な風車にそつと唇を近付け、静かに息を吹きかける。

薄い紙の羽根が、くるり、と一回転した。

狭い明かり取りの窓の外から、抹茶色の鶯がその様子を不思議そうに眺めていた。

（後書き）

『ほしにねがいを』の連載滞ってるくせにつまみ食いしててまじす
いませんごめんなさいwith土下座エンドレス。

このお話は元々、某巨大電子掲示板のとあるネタスレにて投下した
ものを大幅修正した代物です。そのまま転載しなかったのは、当該
スレがそもそも特殊なコンセプトの上で成り立っており、何も知ら
ない人の目に晒しても意味不明なためでした…。

リハビリがてら書いたんですが、けっこう気に入ったので、こちら
にも投稿してみた模様。

ゲストの真里奈さんにご出演願った理由は…やっぱり『ダブル』劇
中において最初の依頼人で、翔太郎に近い人だったから、かなあ。
彼女はメモリを使いすぎた副作用で本来の人格が崩壊して、あんな
悪女っぽくなっちゃったんだと思いたい。

ガイアメモリによる逮捕者の罪状ってなんだろう？と時々考えます。
真里奈さんはとりあえず器物損壊と、殺人、だよね…つらいけど。
たぶん、メモリを利用した破壊行為そのものが罪に相当するのであ
って、現実存在するドラッグみたいに、メモリを使用及び所持し
ただけで罪になるって訳ではないと思うんだな。バードメモリを押
し付けられた床屋の娘さんは出頭してなかったし。

あと、やっぱり副作用の程度も人それぞれじゃないかと予想し
てみる。真里奈さんは暴走もしてしまっただし、ちょっと深刻だった
ってことで。

それと、この作品の中では「春真っ盛り」なのではなく、これから
徐々に訪れつつある「春の足音」みたいなものの表現にも挑んでみ
た。

ラストの鶯さんは、この時期にはちらほら見かける。かわいいんだ

これが。ていうか鶯さんを出したいがためにこの話を書いたといつても過言ではない。あの抹茶色はいいよね！うきうきします！

そんなこんなですが、いかがでしたでしょうか。

『ダブル』ファンの皆様のお気に召していただけたのなら、この上なく光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2840k/>

春待ち風に吹かれて

2010年10月12日00時11分発行